

「お金」の価値は

野瀬 隆平

名画に贋作はつきものだ。贋作と云っても馬鹿にはできず、専門家が見ても本物と区別がつかない。絵具やキャンバス、木の枠などを、科学的な手法で調べても、白黒がつけにくい。

最近ではAIに著名な画家の本物の絵を沢山見せて、その描き方の特徴や癖を学習させた上で問題の絵を見せると、真贋の程をパーセントで示す方法もあるというから驚きである。

それほど見分けにくいのなら、絵を飾って鑑賞するだけなら、どちらを飾っても良いのではないか。

ダイヤモンドなどの高価な宝石類を持っている人たちは、パーティーなどで身に付ける場合は模造品で身を飾り、本物はしかるべき安全なところに保管している人もいと聞く。

話しは少しそれるけれど、ここで連想するのが物の「使用価値」と「交換する時の価値、価格」のことである。最近、資本主義について語られることが多い。マルクスの「資本論」の要諦の一つが、この二つを区別して考察していることである。

確かに、偽物だとはっきり分っていれば、それは高くは売れない。しかし、単に鑑賞するだけが目的の場合、云いかえれば使用価値が求められるのであれば、真贋どちらでもその価値は変わらない。

この考え方に従って、「お金」を考えるとどうだろうか。今日使われている「紙幣」は単なる小さな紙きれである。メモを取るにも手も拭くのに適してはいないので、使用価値はほぼ無に等しい。

一方、交換価値としては、絶大な力を持っている。そもそも、この紙幣の起源は、物の売買に使われていた「金（金貨）」の預かり証だったという。「金」には、交換価値があったのと同時に、見ていて美しい、金箔や宝飾品としての使用価値もあった。かつては金に換えることが出来る紙幣もあったが、今や兌換紙幣は一つもない。

生活に必要な物はそろっているのに、それだけでは満足せず使用価値のない「お金」をひたすら求め続ける姿は、今日の資本主義社会を象徴的に表している。